

From New York

Vol.3

世界の街の“今”を、現地からお届けします



文 / FIFTH New York Office (<http://www.fifthwiki.com>)

毎週水曜日の朝は、ニューヨークタイムズからのメールを読むことから始まります。その日の時事ニュースに簡単に目を通した私は、お目当ての辛口美食評論家フランク・ブルーニ氏が担当しているダイニングセクションを開きました。

そして、真っ先に目に飛び込んできたのは、「ルサークはもはや、エキサイティングなレストランではなくなった」の言葉だったのです。

ニューヨークタイムズは以前「ルサーク」について、「「Rich and Famous. (富と名声)」の象徴であり、特権をも意味する。座っているテーブルの位置によって人間の階級がわかる」レストランだと書いていました。

一代でルサーク帝国を築き上げたオーナーのシリオ・マッチオーニ氏は、1932年、イタリアの農家の家に生まれました。その後、豪華客船のウエイターとして世界を回り、1974年、若干40歳の若さでニューヨークに「ルサーク」をオープンしました。

豪華客船でファーストクラスを担当していた経歴から、上流階級への扱いはお手のものです。持ち前の明るさとチャームな魅力で、リッチな客層をつかんでいきました。

歴代の大統領もニューヨークに訪れた際には必ず来店しました。あのヘンリー・キッシンジャーやビル・コスビーとも親交があり、成功者に対して協力的な彼は、友好的なニューヨーカーの間では、アメリカンドリーム象徴としてエールを送られていました。

フランク・ブルーニ氏は、そんな上流階級のお客に対しても、「美容整形の恩恵を受けているにも関わらず、客層は皆65歳以上に見える人ばかりだ」と酷評。「食を楽しんでいるように見えない」と言うのです。さらに、「客達は最高のサービスを受けた者と最低のサービスを受けた者とはっきり分かれる。貴方が誰かによって」とも加えてありました。この記事は、レストラン関係者はもちろん、食にうるさいニューヨーカー達に瞬間に広がりました。その朝は「ダイニングセクション読んだ?」のメールがいくつ飛び交ったでしょうか。

飛ぶ鳥を落とす勢いのシリオ・マッチオーニ氏でしたが、後のインタビューで、この記事はトラウマになったと語っています。最も家賃が高いと言われるブルームバーグビルに移転した矢先に、この酷評による予約のキャンセルが相次ぎ、一時は「閉店か?」とまで噂されました。

しかし、マッチオーニ氏はイタリアからの移民とはいえ、誰もが認めるニューヨーカー魂を持った人物でもあります。彼はその後、この根性を世間に見せつけるある行動に出ました……。 (続く)

